

児童教育を支援する
「博報財団」が、すぐれた
取り組みを顕彰する

第49回「博報賞」受賞

特別支援教育部門

あわせて文部科学大臣賞受賞
文部科学大臣賞は「博報賞」受賞者の中から
各部門1件まで、特に奨励に値する実践に
贈られます。

岐阜県 ● 岐阜市立明郷小学校 言語障がい通級指導教室（ことばの教室）

同じ悩みを抱える
仲間との出会いが
自信につながる

「吃音の会」は、吃音のある
小学生とその保護者を対象
に、15年前より始まった。

2013年からは、各学期
に1回ずつ、年3回の活動を
続けている。毎回15人前後の
吃音児が参加する集団での活
動は、全国的にも例が少なく
貴重な機会となっている。そ
のねらいは、吃音のある仲間
と出会うことで、子どもが安
心し、吃音に向き合えるよう
になることにある。

「ことばに問題を抱えてい
る場合、積極的に人と関わる
のが苦手な子どもたくさんいま
す。同じ悩みを持つ仲間との
出会いを通して、子どもたち
の自信につながることを願っ
ています」（明郷小学校梅田校
長）

らも吃音の当事者である医師
の福富氏と、これまでの活
動を支えてきた元岐阜本巣特
別支援学校校長の板倉明氏
を迎え、「将来の夢について
考えよう」をテーマに話し合
いが進められた。

プログラムの最初は、小学
1～6年生までの参加者全員
の自己紹介と将来の夢につ
いての発表だ。「サッカー選
手になりたい」「宇宙飛行士」
「100歳まで生きる」「漁師
になってタイを釣ること」な
ど、時おりことばに詰まりな
がらも、一人ひとりが大きな
声ではっきりと語る子どもた
ちの姿に、保護者の熱い視線
が注がれる。

続いて、吃音を乗り越えて
医師になった福富氏の話に、
子どもたちは真剣に耳を傾け
た。質問タイムでは「大事な
場面（ことば）に詰まったらど
うしますか」「吃音で苦労し
たことは何ですか」「医師と
してのやりがいは何ですか」

といった、子どもたちが本音
で知りたい質問が相次いだの
も、吃音の当事者同士だから
こその。

福富氏も、「からかわれる
のではないかと、話すこと
が不安だった自身の過去を
振り返り、「仲間との出会い
を大切に。自分が思っている
より、周囲は気にしていない
こともあります。夢に向かっ
て思いっきりがんばって」と



積極的に挙手し、発言をする子どもたち。

同じ悩みを抱える仲間と 出会うことを通して、吃音と付き合う 気持ちや行動を育む

ことばが滑らかに出ない、吃音の悩みを持つ児童の支援を続ける岐阜市立明郷小学校ことばの教室「吃音の会」。
15年続く貴重な取り組みに、博報賞（特別支援教育部門）が贈られた。



「なかよしタイム」ではチームでゲームも楽しんだ。



ゲストティーチャーの医師の福富氏（左）と、長年「吃音の会」の支援を続けている板倉氏（右）。

エールを送った。

寄り添うことを大切に
15年間にわたる
つながれた支援のバトン

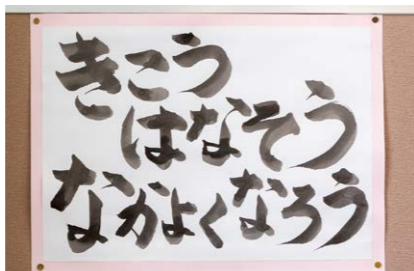
「吃音の会」が立ち上がった
のは、今から15年も前のこと。
しかし異動の多い公立小学校
で、長きにわたって活動を続
けていくのは容易なことでは
ない。その活動を支えてきた
のは、推薦者である村瀬氏を
はじめ保護者、そして子ども
たちなのだという。

「久しぶりに会える友達がい
るから、この会は絶対に休
まない」と笑顔で語る少年
の姿に、梅田校長は相手を崩
す。

吃音の原因は解明されてお
らず、責任は自分にあると苦
しむ保護者も少なくない。そ
んな保護者に寄り添うのも
「吃音の会」の大きな役割だ。
子どもたちが「なかよしタイ
ム」で遊びをしている間、保
護者たちに対しては、5～6
人の小グループでゲストを囲
む懇談会を行っている。

「人前でことばにつまる姿を
みるとつらくなる」という発
言に、一同が深くうなずく。
普段は、会うことが難しい同
じ悩みを抱える保護者同士
が、忌憚なく語り合えるのも
「吃音の会」ならではの。

「なかよしタイム」も終わり、
最後はゲストの板倉氏のこと
ばで締めくくられた。
「みんなが想像する将来に近
づくよう努力を重ねれば、一
緒にがんばれる仲間との出会
いがきっとあります。そうし
た出会いの中に私たちの将来
があります。がんばってくださいね」



ゲストティーチャーに聞きたいこと
や、将来の夢に向かってがんばりたい
ことなどを熱心に書いていく。

「吃音の会」は、子どもたち
に寄り添うことを大切に、公
立小の教師がつないできた地
道な活動だ。全国的にも吃音
児に対する支援は十分とは
言えない中、15年の長きにわ
たって、途切れることなく支
援のバトンをつないできた活
動の意義は深い。

推薦者 お祝いのことば

岐阜大学教育学部
村瀬忍 教授

吃音はことばが滑らかに
話せないのが特徴です
が、スムーズに話せない
のを恥ずかしく思ったり、
周りに迷惑をかけると思
ったりして、次第に話す
のを避けるようになる
ことが問題です。医学
的な治療がないため、
吃音とうまくつきあって
いくという発想が重要で
す。明郷小学校ことばの
教室「吃音の会」は、吃
音のある子どもと保護
者の、吃音への向き合
いを支える、学術的にも
根拠のある取り組みで
す。多くの吃音の子
どもが「吃音の会」で
力をもらって巣立って
行きました。「博報賞」
の受賞を機に、こう
した取り組みが日本中
に広がることを祈って
います。